

旅立ちの未来「旅行業が拓く SDGs の道」

田瀬和夫氏

SDG パートナーズ有限会社代表取締役 CEO

SDGs という言葉を見たり聞いたりするのが当たり前の毎日です。ところが SDGs とは何か、きちんと理解できている人は少ないのではないのでしょうか。その点、今回の講演は SDGs の本質や意味を改めて確認するための情報とヒントが満載でした。目標年の 2030 年が迫るなか、いま一度、旅と SDGs とのつながりを整理し、観光業・旅行業の進むべき方向性を SDGs の文脈に照らして考える素晴らしい機会になりました。

SDGs は「次世代から借金しない」宣言

2015 年の国連総会で採択された SDGs は 15 年後の 2030 年に子供たちへどのような世界を引き継ぎたいのか、それを 17 のゴールと 169 の数値目標にまとめたものです。この SDGs は 1 国の反対もなく全会一致できた合意文書で、人類史的にも、30 万年かけて人類全体の共通合意にたどり着いた極めて重要な合意文書といえることができます。

それほど重要な SDGs ですが、17 ゴールについて説明されても分かったようで分からない。キツネにつままれたように感じるのは、ゴールや目標は文書全体のごく一部分でしかないからです。SDGs は前文や 59 段落からなる宣言、ゴールと目標数値、実施手段等で構成される分厚い文書であり、文書全体にストーリーがあり人類の大きな夢が語られています。ゴールと目標数値を見ただけではストーリーは分かりません。たとえば言えば全 20 ページの絵本のうち 16・17 の 2 ページ分だけ子供に読んであげ



るようなもの。内容を理解するのは無理な話です。

SDGs 理解に重要な 5 つの考え方

SDGs のストーリーにおける重要な 5 つの考え方があります。第 1 は前文に記されている「誰一人取り残さない」こと。冷戦後は経済成長こそが世界課題の解決策と信じられましたが、結果的に富める者と貧困層の格差を広げ憎悪と分断を引き起こしまし

た。格差こそすべての課題の根源であり、人類の最大の敵といっても過言ではありません。だからこそ格差を解消し、社会に参画できない者を生まず誰も取り残さない社会を目指しているのです。

第2は宣言で語られている「インクルーシブ」。社会的少数者が排除されず、すべての人が参画できる社会を作ることです。第3は「in larger freedom」。「一層大きな自由」とは、できることが多くなり、多くの選択がある状態を指します。すべての人が多くの選択肢の中から自分で自分の人生を自由に選ぶことができる、つまり自分らしい人生を生きることができる状態を指しています。

第4は「ウェルビーイング」、言い換えると「よく生きる」ことです。良き人生とは他人が決めるのではなく本人が主観的に決めること。しかし1人ひとりが身体的、精神的、社会的によく生きることができ、自分の人生を最高だと思える世界を作ろうという発想です。第5は前文で語られている持続可能な消費によりこの惑星の環境を守り、「現在と将来の世代のニーズに対応できるようにする」という考え。世代を超えて人類の理想として時間軸が含まれるのが特徴です。5つをまとめると、SDGsが語るストーリーは「世代を超えて、すべての人が、自分らしく、よく生きられる世界」を目指そうということになります。

企業は「きれいごとで勝つ」を目指せ

SDGs時代の企業には単にCO2の削減に取り組むのではなく、継続的に利益を得ながら社会に善をなす「きれいごとで勝つ」姿勢が求められます。「きれいごとでは勝てな

い」が過去の常套句でしたが、これからは「良くて強い組織」で「良くて強い事業」を実現し、きれいごとで勝たねばならない時代。これまでは強い組織はブラック化しがちであり強い事業ほど外部に良くない影響を及ぼし、ごみ・公害問題、人権・搾取問題等をもたらす傾向があり、良い事業と強い事業は相入れないと考えられてきました。

「良くて強い組織」による「良くて強い事業」は、極めて難しい挑戦だからこそ新たな思考方法が必要です。そのひとつが逆算思考。ケネディは1961年にアポロ計画を発表し、8年で必要な技術革新をすべて産み出し人を月に送る目標を設定し実現しました。とてつもない目標には積み上げ思考では到達できず、緻密な逆算思考が必要でした。

ただし逆算思考だけではSDGsが目指す世界は実現できません。積み上げもまた重要。逆算と積み上げで挟み撃ちする「SDGsサンドイッチ」の発想が求められます。たとえば海洋汚染の大幅削減という大目標の達成には、課題が発生しない社会をどう築くかを考え、生活スタイルの変化、化石燃料に依存しない文明への技術革新、教育が欠かせません。一方で目の前の海洋汚染に対処するビーチクリーンやリサイクル技術の開発、分別・廃棄サプライチェーンの高度化も必要。両方の取り組みが不可欠なのです。

鹿児島県の離島で子供たちとビーチクリーン活動に参加し、毎日の積み重ねが浜辺の環境を変えている様子を目の当たりにして、その力と尊さを知りました。同時に、子供たちにいつまでもビーチクリーンをさせられないとの思いも強くなりました。ビーチクリーンのいない世界を次世代に引き継ぐのが現役世代の役目ではないでしょうか。

「SDGs ドミノ理論」も重要です。国連は紛争で荒廃した地域と社会を支援する第一歩を学校給食から始めます。地域の子供たちは給食目当てに登校。栄養が改善され元気が出ると子供たちは目の色を変えて勉強し始めます。読み書きができるようになり進学し、仕事に就けて貧困から脱出できる。また給食の食材を地域の農家や漁師から調達し、彼らも収入が上昇し貧困から脱出できます。ドミノ倒しのように事態を改善できる、そのレバレッジポイント、つまりテコ作用の力点が給食なわけです。

その意味で観光は、SDGs のレバレッジポイントとして期待される産業です。アドベンチャーツーリズムは好例で、観光客が訪れるほど地域が潤い、得た収益で自然環境の回復を進める。そんな取り組みが可能です。沖縄の恩納村ではグリーンフィンズの導入という取り組みがあり、ダイビングの安売り競争や自然環境破壊をなくそうとしています。海の生物や生態系に触れさせず環境を守ることでダイビングの価値向上を図り、利益を増やししながら自然も良くしていく。世界中がそんな競争を始め、知恵比べが始まっています。

世界を改善する者だけが利益を得る社会

SDGs と共に重要性を増す考え方が ESG です。人にたとえると企業戦略は頭脳、資本とビジネスモデルは筋力ですが ESG は内臓。頭が良く筋力があっても内臓が悪ければ力を発揮できません。また、これからの企業は企業本体や事業だけでなくサプライチェーンも健康であることが求められ、そこが不健康なら淘汰される運命にあります。

脱炭素、人権、女性のエンパワーメント、企業統治、生物多様性、動物福祉などについて、企業は健康体でいる必要があります。それも自社が直接かかわっている取り引きや契約だけでなく、サプライチェーン全体の責任を負わねばなりません。

たとえば化粧品会社は主原料のパームオイルを得るにあたり、パーム畑の開墾により失われた土壌や動植物の責任を負います。上場企業は、幅広い責任範囲の事象を調べ開示を迫られる流れです。旅行会社にもサプライチェーン全体の責任の報告が必須になる時代が迫っています。2、3年後には必ずその時が来ますから覚えておいて下さい。

ESG 投資が促す変化は、ゼロサム資本主義からプラスサム資本主義への変化です。直接的に他人の権利や自然環境を侵害しなければ儲けてよかったのが、これまでのゼロサム資本主義。対して他人の権利を後押しし自然環境を現状より良くする者だけに儲けが許されるのがプラスサム資本主義。すでに世界はその方向へ動き出しています。

日本企業が目指すべきは「六方よし」経営です。近江商人の「三方よし」である、売り手よし、買い手よし、世間よしに加え、作り手よし、地球よし、未来よしの「六方よし」。その実現こそが SDGs につながるのです。

<Profile>

たせ・かずお●東京大学工学部を卒業後、1992年に外務省入省。2001年より2年間、緒方貞子氏の補佐官として「人間の安全保障委員会」事務局勤務。その後、国際連合事務局、デロイトトーマツコンサルティング執行役員を経て2017年9月に独立し、SDGs パートナーズを設立。企業の SDGs 戦略立案・実装や ESG 情報開示等を支援